

あ
上がり三ハロンの夢
ゆめとりい
あつみ
鳥居 淳瞳

受賞のことば

この度、四度目の次席をいただいた。「このまいくと末はステイゴールドか、ディーブポンドか」競馬仲間にはそう評されている。

人生の折り返し地点に立って自分の歩んできた道を振り返ったときに、まだまだ夢を持って生きていきたいと思い、今回のエッセイを書くに至った。

人生後半に夢を見るアラフォー女の作品をいつも読んでくださる審査員の先生方に心からの感謝を込めて。

プロフィール

1986年、和歌山県に生まれる。和歌山工業高等専門学校を卒業後、建設コンサルタントに勤務。淀と夏競馬をこよなく愛する。エッセイでは人生を末脚勝負に賭けようとしているが、好きなレース展開は前残り。

「行けー！そのまー！」

「差せ差せー！」

騎手は懸命に追い、馬は力の限り駆け、観客の歓声が響き渡る。馬が最大の能力を発揮するレース最大の見せ場、上がり三ハロン。どんなレースでも、誰もが夢を見るのは後半のその瞬間なのである。

——ウマのしごとができますように

——本をかく人になれますように

今から三十数年前、一年一組の教室では、晴れ渡った夏空を背景に色とりどりの短冊がなびいていた。その頃の七夕は今のような酷暑ではなく、梅雨明け特有の爽やかな暑さであったように思う。

「馬の仕事って乗る人？」

私の質問に幼馴染のこうちゃんは答えた。

「育てる人になりたい。乗るの怖いもん」

やんちゃ坊主だが怖がりな彼らしい言葉を私は茶化した。

「あー……運動神経ないもんね」

「うるさい」

ニコッと笑ったその右頬には保育園の時に木から落ちて作った傷跡が残ったままである。こうちゃんと私は、

家も誕生日も近いこともあり、生まれたときから姉弟のように育った。彼の父は大の競馬好きで、その影響で動物好きのこうちゃんもよく競馬中継を見ていた。そして、月曜日の教室で興奮気味にレースの様子を語ってくれた。

「そういうあつちゃんは飼育小屋の前の銅像やん」

本の虫だった私をこうちゃんはそう表現して笑った。

登下校中にランドセル姿で本を読む私の姿は、飼育小屋前にあった二宮金次郎像にそっくりだったらしい。

「願いがと、叶ったらいね」

二人でそう願きあった。本を読む私の傍らで馬の話をすることくちやんとそれに相槌を打つ私。そんな日常が過ぎた先には、競馬中継ではこうちゃんの育てた馬が走り、近所の書店には私の書いた本が並んでいる、そんな未来が当たり前に来るのだと、私達は信じて疑わなかった。

中学に入る頃に、私は見よう見まねで小説を書き始め、こうちゃんは何やら競馬の雑誌を読み漁っていた。いつしか彼がレースの話をする相手はクラスの男子になっていたが、私は教室の片隅でノートにペンを走らせながら彼の弾んだ声に耳を傾けていた。

夢を追うことができるのもひとつの才能ではないか。そんな風に思うようになったのは、中学を出て進学する

時である。ちょうどその頃は未曾有の就職難の時代で、

誰もが生き残るための道を選ぶのが精一杯だった。私は就職に有利な高等専門学校で土木工学を学ぶ道を選択し、

こうちゃんは工業高校に入った。こうちゃんの父が体を壊しがちになったのはこの頃である。彼は高校卒業後に地元の小さな工場に就職し、休日は家業の農作業を手伝うようになった。

そんなある日の夕方、学校から帰ってきた私は、鼠色の作業服姿のこうちゃんに呼び止められた。ちょうど彼が就職して一年半が経とうとする二十歳の夏だった。

「俺、北海道の牧場で働きたいと思ってるんやけどどう思う？」

「北海道ってことは馬の？」

私は目を見開いて頬の傷がやや薄くなった彼の顔を見た。

「親父もまだなんとか仕事できるし、今がチャンスやと思う」

その頃の私は県外の企業への就職が決まって卒論に追われていた。私が小学校の学舎に置いてきた夢を、彼が変わらずに持ち続けていたことが眩しかった。そして、その強い光は私の心に暗い影を落とした。

「でも親を看るのにいつか帰って来ないとあかんやろ。」

せっかく入った職場を辞めて、帰ってきて次の保証はいやろ」

彼は田舎の長男坊。悩む理由は明白であり、私はそこを的確に、確実に、突いた。

「そうやな……」

彼は長い付き合いの中でも見たことがない苦い顔をした。私はそれ以上言葉が出ず、彼もまた何も言わなかった。そして、あれから二十年近くが経った今でも同じ作業服を着ていることが、彼の出した答えだった。

その日から、私は文章をまったく書かなくなった。書く気が起こらなかったというのが正しいかもしれない。そして、高専卒業後は県外に出て幼い頃の夢とは程遠い職に就いた。やりがいと安定があったこともあり、夢を忘れた日常は淡々と過ぎていった。あの短冊を書いた夏の日が夢だったような気さえた。

それから十年近くが経って三十路に差し掛かった頃、単調な日々に変化をもたらしたのは意外なことに競馬だった。知人に連れられて京都競馬場を訪れたのである。たったそれだけのことだったが、私は競馬の魅力に一瞬で引き込まれた。青い芝の上を駆けるサラブレッドの美しき、響き渡る蹄の音の迫力、そしてゴール前の歓声。週末に暇があれば競馬場に通うようになり、情報を得るべくネット記事や本、雑誌を読み込んだ。『優駿』もその中の一つだった。

ある夜、寝る前にベッドの中で優駿のページをめくっている、「優駿エッセイ賞」の文字が目飛び込んできた。

「書きたい」

十数年ぶりに湧き上がった感情だった。今の自分を惹きつけてやまない光景をなんとか形にしたいと思った。私はベッドから出てノートパソコンを開き、勢いのまま

エッセイを書き始めた。その夜から書いては消すを繰り返して、書き上がったのは締切の前日だった。完成した原稿を速達で送った直後に見上げた夏の青さは今でも忘れたい。

ただただ勢いで書き上げた粗削りのその原稿は佳作をいただくに至った。翌年もそのまた翌年も応募を続けた。灰色の日々が極彩色に変わったような感覚だった。文章を書くことは大人になった私をすっかり夢中にさせた。

そして、書くたびに鼠色の作業服姿のこうちゃんの横顔が浮かんだ。私が余計なことを言わなければ、彼もまたこんな光景を見ていたのかもしれない。

「まだ二十歳だったのに……」

少しくらい回り道をしてもいい歳だったはずなのに。先が見えない不安にとらわれて、彼の背中を押せなかったことが悔やまれた。

そんな思いを抱えたまま、また数年が過ぎた。うだるような暑さが続くお盆に帰省した私はこうちゃんの実家へと向かった。ここ数年患っていたこうちゃんの父が春先に亡くなったのだ。初盆を迎えた仏間には線香の香りが漂っていた。こうちゃんに目元がよく似た遺影に手を合わせていると、

「余命宣告されてからも元氣やったし、息子も連れて競馬場に行ったりして、親孝行できたから悔いはないよ」

こうちゃんがそう言った。久しぶりに会うその頭にはちらほら白髪が見える。彼は十年程前に結婚して、一女の父になっていた。小学生になった長男が横に座って退屈そうに体をくねらせている。

「お前の書いたエッセイ読んだよ。びっくりした」

私は何も話していなかったが、彼は今でもよく競馬関連の新聞や雑誌を読んでいたのだ。その言葉に改めて胸がきしんだ。

「今更やけど、あの時にあんたの背中押してあげられなかったこと後悔してんねん」

「えらい昔の話やな」

「あんた、後悔してないん？」

「してない、って言うたら嘘になるけど、今は今でそれなりに幸せやし。それに俺らの人生はこれからやで！」

「？」

彼は息子の頭をぽんと叩いた。

「大きくなったら何になりたいんや？」

「ウマにのるひと」

答えた少年の顔があまりにも幼い日の彼と同じだったので、私は思わず吹き出してしまった。乗る人と答えるあたり、どうやら父親よりも運動神経が良いらしい。

「俺の人生後半の夢やで！」

「前向きやな」

「競馬で一番夢が見られるのは上がり三ハロンやからな。まだまだこれからや」

右頬の傷はもうすっかり見えなくなっていたが、彼はあの日と同じやんちゃな笑みを浮かべた。見えない不安にがんじがらめになって、最初の位置取りすらおぼつかなかった若い頃の私達。そんな私達にもまだ夢を見る機会が残されているらしい。今度こそは……。人生後半への期待を込めて、私は少年の頭に手を置いた。

「頑張れよ」

人生で選べる道はひとつしかない。しかし、その道を投げ出すことなくしっかりと歩んでいけば、意外と面白い方向に繋がっていくのかもしれない。

いつしか少年が歩む道を私の手で綴る未来が来るとしたら……。

そんな途方もない上がり三ハロンの夢を見ながら、私は今、この原稿を書いている。